提出締め切り: 帰国後１ヶ月以内　　提出先: shien@asafas.kyoto-u.ac.jp

京都大学大学院　アジア・アフリカ地域研究研究科
フィールドワーク・インターンシッププログラム 2011 年度　JASSO 派遣報告書

報告者氏名　市村徹也　　2010 年度（入学）

1.研究課題：
北部ベトナム都市近郊農村における労働の変容に関して(仮)

2.派遣期間：
平成　23　年　8　月　2　日　～　23　年　10　月　5　日　（　63　日間）

3.今回の派遣により、申請時に自身の目的としてあげた点について得られた知見を述べてください
今回の派遣での目的は、ベトナムの農村部・集落において、市場経済化に農村在住者がどのように対応しているのかを労働力の配置の変化・現状から理解することであった。今回は調査村に滞在し、約 200 世帯の訪問、インタビューを実施し労働力の配置に関する傾向が理解できた点が成果として挙げられる。

調査村では、2005 年を前後に近隣に工場(特に日本等海外輸出向けの縫製業)が建設されるなど、元来とは異なった形での就労体系が現れた。またこの時期にハノイへの交通網が発達したことも大きな変化であったと思われる。多くの世帯がこれにより、ハノイへの日帰りでの出稼ぎや果物の販売、あるいは縫製業労働による村落外の市場へのアクセスが可能になり、多くの世帯が農業(特に商品作物)＋α(上述の労働のいずれか)という形で多角化を図りながら、世帯規模や世帯の構成メンバーに合った経営戦略を実施している。

調査を通じ、たとえ現在は農業を行っていなくても、かならず将来的な帰農を考えている世帯が多く、農業が労働の軸にあるのではないかと、報告者は考えるようになった。

4. 自身の今後の海外への渡航や留学に向けた課題や展望について
回の渡航では、上述のように労働力の配置及び収入の面から、現在の調査村の傾向を理解することができた。また 200 件近い世帯の情報を手に入れることができた。

ただし、今回の調査に関しては、①世帯調査しか実施できなかった点、②あくまで現状の把握に重きを置いていた点、③労働と収入のみにしか焦点を合わせていない点等の問題がある。

今年度は情報の集計に集中するが、それによりいくつか焦点を絞ったうえで、来年度以降上述の問題を解決するべく、再び渡航をしたいと考えている。

5. 本プログラムに関して意見をお聞かせください。また、今後どのような留学プログラムがあれば参加したいですか？

本プログラムの支援により、滞在中経済的な心配をする必要がなくなり、充実した滞在と調査ができました。来年度以降もこのようなプログラムが継続されることを望みます。

学生の主体的な計画では、確かに調査等学生自身のやりたいことをできるというメリットがある半面、それ以外のことを知る機会がどうしても減ってしまうように思います。例えば私の場合、調査村のことや研究対象のことはたくさん知ることができましたが、他の村のことや研究対象外のことは分からないままです。

そのため、フィールドスクールのような、自分の研究対象地以外のことを知ることのできるようなプログラムがあったら、と思っております。

署名